

JIA news kinki

翔
syo

no.102/2007

春号





表紙写真：
水墨画「響 Sound」 大江 一夫

表紙解説 - 響 Sound

墨には五感がある。

墨色の深さ、美しさ、大自然や無限の生命力、

自然の神秘と自分の波長が

響きあった瞬間に生まれる。

CONTENTS

特集

「JIAの今」 吉羽逸郎 3

連載

「和のこころ」 伴野久美子 5

「美しい国づくり、
美しい街づくりに向けて」 末村祐子 7

「JIAデザイントーク」 山本光良 8

「住宅部会通信2007」 湯川君雄 12

「建築家の視点」 好川忠延 13

「都市点描」 長尾 健 14

情報

新入会員紹介

「編集後記」 小池啓夫 16

「JIAの今」

吉羽逸郎

(近畿支部支部長)
(アイ・エフ建築設計研究所)

はじめに

耐震偽装事件以後、建築士法と建築基準法の改正に向けての様々な議論が展開され建築家協会として、建築家法に近づくチャンスと考え仙田会長を中心に国土交通省に働きかけ、一時は「統括資格」という活字が新聞に登場し私たちも期待したが国土交通省が本気でなかったのか、あるいは他会の力によるものか、すぐに消えてしまった。社会が望むところでないとわれわれの利権要求と思われ成立は難しい。数人の地元選出国會議員にもお会いし協力をお願いした。建築家の立場と責任、入札が良くないこと、社会活動のこと等、基本的には我々の考えを理解いただけた。そしてもっと情報が欲しいということだった。日頃からの接触の必要性を痛感した。JIAは政治活動をしないが社会貢献するための行動と考えていきたい。

入札問題も大きなテーマで最近のダンピングは目に余る状態でJIAの倫理規定もむなしく感じられる。新しく設計者選定委員会を設けて検討を加えてきたが方向は見えていない。本部の対社会行動委員会や設計者選定法推進会議の情報を得つつ支部として、今春の首長選挙での各立候補者に会い設計入札についてのアンケートを行う活動を通じて入札は良くないことをアピールし当選のあかつきには入札をやめるようにして貰いたい。

社会に向けて

支部長就任時からの大きなテーマの一つが、社会にむけた活動や情報発信を積極的に行い建築家を定着させることです。近畿支部にあった「対外業務委員会」を「対外活動委員会」へと名称を変えました。この活動は地域に密着した各地域会が中心となります。

今後の活動の柱は四つ考えられます。第一は教育系です。子供たちに住まいや自分の町に関心を持てるようなプログラムを作り学校へ出向くのも方法です。せっかく地域に入るわけですから父兄や先生、地域の人との交流を通して建築家と設計の重要性を伝えたいと考えています。

第二は環境系です。建築行為は多くの資源とエネルギーを使い、また地球温暖化にも影響します。敷地から地球まで環境について行動し発信することは建築家の責務です。第三は行政社会制度系です。入札問題や法規改正など行政との接点を通じて都市建築行政の枠組みに関与し、社会の仕組みに影響することです。第四は街づくり系です。市民と一緒に学習し理解し、街への意識を変えてゆこうとすることです。たとえば建物マップを作ったりイベントへの協力等が考えられます。どの系もいくつかの委員会が連携し協力することが必要になり、会員それぞれの参加が必要となります。まずは会員アンケートから始めたいと考えています。

大阪地域会の設立について

大阪地域会の設立に向けて準備委員会で検討してきました。東京では区単位で順次、地域会が設立されており地域会のないのは大阪だけになりました。大阪をいくつか分割するのか、支部との関係をどうするのか、会費をどうするのか等いくつかの問題があります。現在本部で来年度に向け検討中の組織改革との関係もあり、大阪地域会の設立は2008年度以降に延期する事にしました。各地域会も財政事情は苦しく、滋賀、和歌山、兵庫では地域会費を頂いていたり2007年度から徴集を予定しています。大阪は活動が支部と重なっていますが今後は独自の活動をし又各地域と連携していくことが必要になります。そして支部は本部と地域会の間での調整を主にした役割になると考えられます。

支部財政の状況について

現在の近畿支部の会員数は818人（2007年4月9日現在、休会者含）で1992年のピーク約1200人から大きく減少しています。

財政的には、本部からの支部運営費が会員減と会費半額の影響で半減したため、皆様に協力金のお願いをさせていただきました。

当然、予算も2003年度比60%となり合理化や緊縮財政をしいられています。2008年度も状況は変化する見通しは有りません。そのため4月17日に臨時総会を開催し「近畿支部活動費」を全会員にお願いすることを決議いたしました。これは総会決議であり全会員の協力が原則となります。皆様のご協力をお願いいたします。

会員数とともに年齢構成も問題です。現在45才以下の会員は12%しかいません。今後、高齢の会員や団塊世代の会員の減少を考えますと会勢に不安を感じます。若い会員がいきいきと活動できる魅力のあるJIAにしていくことが必要です。昨年度からスタートしたJIA近畿支部新人賞は若い建築家がJIAに接するいい機会を作りました。10名の若い会員を迎えることが出来ました。今後はさらに魅力のある事業を展開せねば成りません。

私の支部長一年目の大きな仕事に、11月に奈良で開催した全国大会が有りました。奈良地域会のご尽力で大成功に終えることが出来、素晴らしい大会であったと評価されました。全国から約560人の会員の参加を得、近畿支部からも多くの会員に参加いただき有難うございました。

一人の日本人として伝えたいことがある

伴野久美子

(大阪芸術大学非常勤講師)
(現代美術家)

1 和のこころとはなにか。

ある人々は、「和のこころ」とは、日本の文化を象徴するときを使う言葉「侘び寂び」と思っている。

また、ある人々は、「和のこころ」に、日本の建築や工芸に見られる職人の繊細な技を含めている。

しかし、私は、一人の日本人として「和のこころ」について考えてみたいと思う。それは、私の中の「和のこころ」、その具現化が私の行なっている活動であるということができるだろう。

そこで、私の活動がどういうものなのか、どうしてそういうことを行なっているのかを記すことにする。

2 美術の世界、ことに作品における「和のこころ」は、個展テーマ「“和”の試み」につながる。

私は、大学4年の秋、現代美術のコンクールに入選したことから、美術の世界に入った。就職活動で悩んでいたのだが、「好きなことをしたらいいやん」とそのときの審査員、元永定正氏にいわれ、「目から鱗」。絵が好きだったので、卒業後元永先生がアトリエで開いていた教室に入門した。その教室が終了になるまでの一年半、教えていただいたが、そこで先生から私の作品の特長として「色づかい」を指摘された。このことは、作品のテーマ「色による空間表現」となり、また、韓国の美術家から「韓国では絶対使わない色づかい」といわれたことにより、自分の中の「日本」を意識することになった。

その頃、小説家や美術家が集うパー「くーる」の福嶋富美子さんに「あんたも画家を志すなら、外国のことを勉強するだけでなく、日本のことも知らんとならんよ」と薦められたのが、茂山忠三郎師の狂言リサイタル。そこに存在していたのが、私が無意識に描いていた色づかい。ああ、ここに私の作品のルーツがあったのか、と思った。その後能も観るようになり、舞台プロデュースにつながってゆく。

一方、実家が檀家である女乙山多聞院法泉寺のご住職から本堂新築に際して曼荼羅(サイズ:タテ9尺×ヨコ7尺)を奉納する機会を与えられ、95年落慶法要が行なわれた。同年、阪神淡路大震災を体験した私は、キャンパスの大作が人に危害を与えるのではないかと怖くなり、曼荼羅制作で勉強させて

伴野久美子“和”の試み展IV

伴野久美子“和”の試み展
案内状両界種字曼荼羅
落慶法要パンフレットより古典の新芽シリーズ特別企画
「伊集院兼常の美意識」
チラシ

和のこころ

いただいた日本画の世界、ことに表装の技術に自分の美術作品の表現方法をリンクすることとなった。

それが、伴野久美子“和”の試み展、というタイトルでこれまでに5回展開している個展で、その展覧会構成のテーマを現すサブタイトル（夏の譜跡 和と洋の間 あわい に。等）にも日本の独自性を示している。その他にも「場」や「時」の分断を意図した「結界」、昨年からは、季節と色彩をより意識した「朱夏浪漫」、「白秋流麗」、「青き春の古（いにしえ）」へと続く。

3 舞台の世界、さまざまなケースがあり、「和のこころ」も多種多様といえる。

能の世界に魅せられて、「能のおっかけ」を自認、さまざまな舞台をいろいろな場で観ているうちに、個展に際して能楽のデモンストレーションをしていただくようになった。その延長として、能の囃子の音楽性の高さをコンサートとして提供する「能の音楽 間の音楽」を95年から98年まで4回（大倉流小鼓方・久田舜一郎師と共同プロデュース、ジーベックホール共催）、01年03年には自主企画で、着物文化とモダンダンス、古典芸能の融合による「源流を 着る 舞う 奏でる」を開催。00年から04年まで20回開催した、HEP HALL主催「HEP HALL学習塾 現代を生きる古典」シリーズは、現代的な切り口で日本の古典芸能を若い人たちに向けて紹介する企画で、室町時代の能狂言を中心に、奈良時代の声明から江戸時代の文楽・落語まで日本の古典芸能を網羅し、構成も関連のある演目による異ジャンルの共演「落語と文楽のあやしい関係」や、日本語に着目した「現代詩を謡う」等々こだわりをもたせた。

現在は自主企画で、異ジャンルの融合でコトバを加味した創作を行なう「古典の新芽」シリーズ、カジュアルに古典と接する「なかなか あえない 芸能」シリーズを展開、今年からは、おとな子どもも一緒に楽しめる「見て 聴いて 参加して」シリーズをスタートする。

4 出版の世界、編集者としての「和のこころ」は「めざせ文人」。

出版では、新聞社勤務で培った文章力と美術家としての感性で行なうデザイン力がウリ（？）、絵を描き文も書く「文人」が理想だ。「土魂商才」

宇治田福時著、玉乃光酒造（株）出版部発行 は、内容もビジネスにおける「和のこころ」＝「武士道」の追求、装丁もビジュアル面だけでなく機能性合理性を有する。

5 未来へ、「和のこころ」を伝えたい。

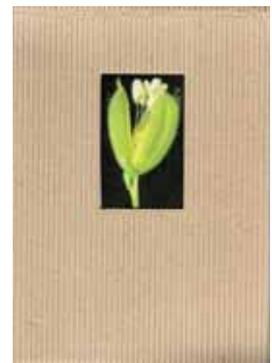
これらによって、私の中の「和のこころ」、日本人としての文化遺伝子を、私を導いてくださった方々のように、次の方に伝えることができれば、幸いだ…。



源流を 着る 舞う 奏でる
Vol.02「オペラにゆくとき
着る服」チラシ



「土魂商才」表紙



「土魂商才」カバー

美しい国づくり、美しい街づくりに向けて

末村 祐子

(近畿支部建築家認定評議会評議員)
(大阪経済大学客員教授)



ご縁があり2006、07年度、近畿支部建築家認定評議会評議員としてJIAの活動に参加させていただくこととなった。日頃は公的部門改革(行政改革や非営利制度・組織・マネジメント論等)を中心に公共政策研究に携わっており、建築については自治体で都市計画や景観に関わる程度だが、公共政策に関心を寄せることになったきっかけが「日本の町並みや日本人の暮らしに対する意識への関心と疑問」であったことから、今回、造家学会にまで起源を遡るJIAの長い歴史と取組みに触れることができたことを嬉しく、またその存在を心強く思った次第である。他の第一人者の先輩方とともに取組ませて頂く機会を頂いたことに感謝するとともに、若輩なりに役立てればと思っている。

公的部門改革の分野では、上意下達の権威による統治に対し、政府・営利・非営利(以下NPO¹⁾)の3者のパートナーシップモデルによるガバナンスへの関心が高まりつつある。日本でもNPO法や昨年の公益法人制度改革などパートナーシップモデルのための基盤整備が進みつつあり、その方向性に鑑みれば大別するとJIAもNPOに分類できる。今回の建築士法改正における建築5団体の取組みも、政策形成へのNPOの関わりという点で意義深い歴史の一頁であり、今後さらなる向上をと思う。個人的にも政策形成におけるNPOの役割を重要に思ってきたことから、国内外の優れた事例を数多く見てきたが、そうした取組みにはNPOの巧みな動きが牽引役となった例も多い。規模が大きく見えるNPOであっても資金・資源が無尽蔵にあるわけではなく、優れた取組みの後ろには余念のない事業の取捨選択と論理構成が存在する。

JIAが建築家の職能を確立するための活動のひとつとして、長年に渉り建築士法の改正に取り組んできたことを考えると、耐震強度偽装事件を契機に建築士法が急速に改正に至ったことや、その内容が「統括する建築士=建築家」の認定を可能とするものには至らなかった²⁾という事実は、JIAとJIAの事業を取り巻く環境が大きく変化したことを意味するものと拝察する。今回の変化をチャンスに換え、よりわかりやすいメッセージを事業を通じて発信して欲しい。そして、「登録建築家制度」がその流れの中で市民にとって大切なものとして支持され、「美しい国とまち」につながることを願っている。

1 日本におけるボランティア団体といった狭義の意味ではなく、営利組織が配当をインセンティブとして資源を確保するのに対して、配当による資源動員を行わない組織およびそれによるセクターを本稿ではNPOと称する。

2 JIA建築家2006年10月号 2p 仙田満会長原稿参照

「JIAデザイントーク」

開催日 2007年1月30日18:30～20:30

会場 大阪市中央公会堂

山本光良

デザイントークコメンテーター



今回のプレゼンターは関西を中心に活動されている若手建築家の末包伸吾氏、志柿敦啓氏です。共に最近完成した個人住宅作品を2点ほど発表され、それぞれの個性が出た力作であった。

共通して話題になったのは建築の「普遍性」と「固有性」であった。普遍性について末包氏は固有性を引いたところで普遍性を獲得したい、また志柿氏は作品の中に共通する空間の質から普遍性を見出す、とそれぞれ独自の考え方を提示されました。

コメンテーターからの意見としては、建築にとって普遍性とは切り口が多様である

今回のテーマは空間の質が普遍的に成りうるかということの話題では、

建築の目的のために普遍性の追求が必要なものか、

普遍性とは、長く建築が使われることにより結果として獲得するものでは、等々、今後建築を考えていく上でまた問いかけとして有意義であった。

末包伸吾氏（神戸大学）

発表作品 / b-in-d / AGATSUMAの家 / 夙川の家

・b-in-d（愛知県豊橋市）

立地環境に対する回答として、当初「周りから遮断したコートハウス案」、「日本の伝統的雁行型案」が考えられたが別の選択もあるのでとの思いから、新しい空間の「かた」として門型のフレーム構成による建築を考えた。形式をつくってしまうことに躊躇した、もう少し緩やかな「かた」でも良いのではとの思いの中で出来上がった建築である。

トライアル中の作品との説明であったが、その迷いが建築家の個性の表れとなった作品である。

敷地は豊橋市郊外のスプロール化した、かつての農地が点在する拡散的な風景の平坦地。長方形の敷地は短辺が北側の地区幹線道路に接し、アプローチはここからとなるが住宅の立地としては道路に面して閉鎖的なならざるを得ない状況である。このような周辺環境から見て、コートハウス型のシンプルな箱型の建築は立地に対する一般的な回答であろう。郊外建築と平坦な農地が点在する風景の中に建つユニバーサル空間デザインが唯一建築の存在を位置付けるものであろう。

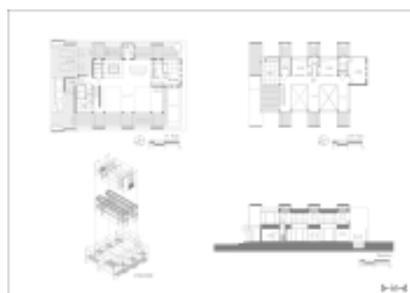
しかし作者は、周囲に対して閉鎖対立することへのためらいが、完全な閉鎖型のコートハウスではなく独自の門型フレームによる建築の分節化とあわせて、あいまいなスペースによる周辺環境へのかかわりを求めようとした。結果として独自のデザインと景観を生み出しており評価できる。



「b-in-d」外観



「b-in-d」内観



「b-in-d」平面立面図

デザイントーク

プログラムは夫婦、子供2人と母で構成する5人家族の住宅。クライアントの夢の家を実現すること、80畳の広さを持つリビングルームを持つことが条件であった。巧みなプランニングとゾーニングそして立体構成により各室を門型フレームにうまく収めている。また4枚の門型フレームと均等なスリットが内外空間の融合を決定している秀作である。

内部空間の中心を占める80畳大のリビングは体育館のようになることに危惧し、作者はグラウンドに実寸のサイズを書きスケールを検証したとの事。この広さのリビングルームは海外では多くの事例があるが上足の日本型ライフスタイルでは特殊なケースであろう。ハイサイドライトや外部との関係を持たせたシークエンス、分節化した吹き抜けなどでスケールダウンしヒューマンスケール化をはかり建物内の広場になるような非完結型のリビングになっており、クライアントがこれからどう使っていくのかで評価が出るであろう。

・AGATSUMAの家

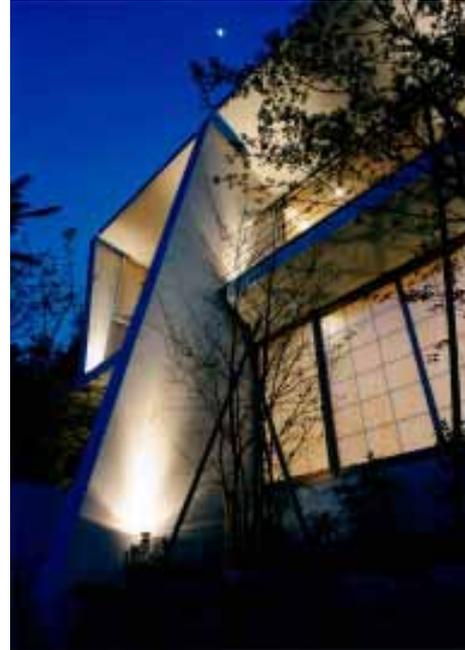
周囲のカラマツ林を建築に取り込むことを最も重要視した作品。

建築構成は一枚の紙を折り曲げて考えた、内部から外のカラマツ林が見えることを意識したとの事ですが、建築の内部空間とのかかわり方の構成演出とプランとの関係性においてもう少し配慮があればと思われた。

むしろ建築的な簡潔性や自然の中に存在するフォルム、景観を重視した建築です。

・夙川の家（兵庫県西宮市）

敷地は北側の道路に接した高低差が7mの雑木林の北斜面を持つ住宅地である。アプローチは北斜面を階段で上がっていく、建物は敷地南側の平坦地に立つ。北に兜山を望む、山麓生活を体感できる、西宮、芦屋の空間体験、阪神間のトポロジーと呼応する空間を作った。海から山に抜ける気持ちのいい開放的な空間を3枚の壁で構成した空間構成で南北に光と風の流れる空間、を生み出している。外部空間はこの3枚の壁がデザインの特徴になっているが、内部空間も規定するこの壁とプランとの関係が今ひとつ明確でないとの意見が出た。



「夙川の家」外観



「夙川の家」内観



「夙川の家」平面断面図

デザイントーク

志柿敦啓氏（志柿敦啓建築設計事務所）

発表作品 / 高砂M邸 / 芦屋K邸

まず、最初に作者がこれまで研究してきた堀口捨己のスライドから説明が始まった。

インターナショナルスタイルとロマン的スタイルの拮抗、ぶつかり合いの中での関係性が今回の作品のベースになっていることを、谷口捨己の岡田邸、紫烟荘、若狭邸の分析を紹介しながら説明された。

建築の存在について、普遍性、田園的非都市的なものと永遠なるもの、世界観のモデル、伊藤忠太、利休の茶、二つの異なる次元をアートに、同位並存と間合いについてまた右脳と左脳の対立する世界観の存在と脳幹による一体化等々を例に挙げながら、建築の考え方を独自に展開され、それが作者の作品にどう表現されるか期待を持たせる説明であった。

・高砂M邸（兵庫県高砂市）

ワームハウス。

黒い壁の寝室が空中に浮いて、明快なフォルムとなり、それがまちなみの景観の中に存在感を生み出している。白と黒、ハレとケ、2つの概念を組み合わせた空間の論理構成によりデザインされた家である。

平坦で特徴のない郊外住宅地に建つ女性の一人住まいの家。アトリエ（住宅の中で非日常的な部分、作者によるとエロチックな部分）を持つ住宅プログラムの専用空間をリニアに引き伸ばして連続させ、「ワーム（虫）」にしたものを立体化した建築。

結果として変化豊かな住宅となり、暗い空間と明るい空間、独自のスケール感、黒く塗装された構造用合板で構成された極限まで幅を狭くした細長い幅2mの寝室の構成は、作品としての自立を目指した新しい建築プログラムへの提案型建築である。

立地周辺環境に対するかわりが希薄ではないかとのコメントーターの意見があった。



「高砂M邸」外観



「高砂M邸」内観

「高砂M邸」撮影：平井美行



「高砂M邸」平面図

デザイントーク

・ 芦屋 K 邸（兵庫県芦屋市）

立地は市街地の住宅商業が混在している南北に長い敷地。クライアントは海外で見つけてきた小物を売る雑貨商を営む方でグラフィックデザイナーでもある。

商品やものが将来増えてくるのでストックを考慮すること、老後に、ストックが増えても暮らせる家が求められた。

家族的なファミリー型ではない空間の提案、都市的な空間を意図して建築は明快な3層構成となっている。1階がリビング、食堂、寝室、2階がワーキングルーム、和室、3階がテラスで構成され吹き抜けを介して立体的に一体化融合させている。

建物の中心となる空間、ボリュームをつくったという1階の吹き抜けのリビングは、西洋の図書館の閲覧室を参考にし、下の部分は機能的で人が活動する部分、上部の吹き抜けは機能のない、ものとのかわりがない空間とした明快な位置付けがなされている。

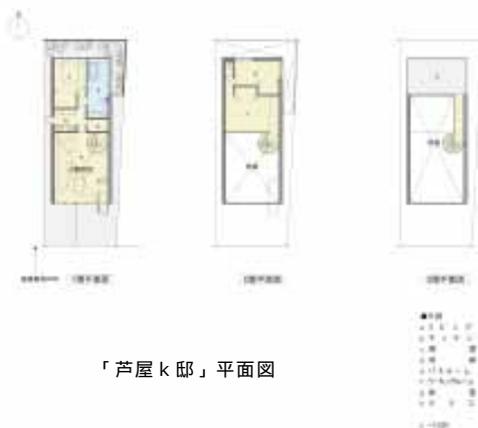
白と黒、ハレとケ、吹き抜け上部の禁欲的なプレーンな壁が豊かな空間を作り上げ気持ちいいプロポーションを持つ建築である。この空間は眠くなるとの施主の感想は、成功したと作者の談。都市的な空間をつくりながらも建築と都市との関係を問いたかったが時間切れとなった。



「芦屋 k 邸」内観



「芦屋 k 邸」外観



「芦屋 k 邸」平面図

「芦屋 K 邸」撮影：平井美行

東本願寺見学

湯川君雄

(ユマ設計)



担当世話人：石井和浩、湯川君雄

2006年8月5日(土)に恒例のビアパーティを京都駅前ルネサンスビル地下1階「アサヒスーパードライ」にて開催しました。当日は非常に暑い日で、先だって行なわれた「東本願寺御影堂見学会」の影響もあり、大江会長の乾杯の挨拶も待ちきれないほどの勢いで、皆様かなりビールが進んでいたようです。

20名の方が参加され、住宅部会より13名、京都会からの参加6名。又、見学会でお世話していただきました日建設計本願寺改修工事設計室長の二宮氏にも参加していただき2時間非常に盛り上がった時を過ごしました。

先だって開催しました「本願寺御影堂見学会」には、28名の方に参加していただきました。見学に先立ち、御影堂を囲む鉄骨の素屋根内に設けられた会議室にて当工事の概略の説明を受けました。

- 1) 御影堂改修工事の宗派内での位置付け
- 2) 全体工程表
- 3) 改修の基本方針
- 4) 他の巨大木造建築物(東大寺大仏殿等)との比較
- 5) 防災設備の考え方
- 6) 耐震補強の考え方

改修の基本方針については、「極力廃材を少なくする」という方針のもと、数々の試みがなされ、屋根瓦の再利用や、葺き土の再利用等の工夫をされておられます。

又、耐震補強においては、天井内に「牛引き」と呼ばれる巨大な大梁があります。他の牛引きは全て松材が用いられていますが、内陣正面上部だけは2000年前に伐採された巨大な樺が用いられ、大規模な補強が必要となっているそうです。内陣正面両脇の柱の柱頭部分が挫屈しておりジャッキアップが現在行われています。2時間という限られた時間の中で、最後は時間が足らず1階部分の見学や、十分な質問時間をとることが出来ませんでした。参加された皆様、大変な暑さの中の見学会、ご苦労様でした。



大屋根の説明を受ける見学者達



妻側から見た現在の状況



小屋組内部の補強状況

最近の保存再生で感じること

好川忠延

保存再生委員会
(好川忠延建築設計事務所)

先日、所用で東京に行った。新幹線が近付くと、汐留の蝸集する超高層群に驚かされる。これで東京の風向きが変わったと言う。やがて有楽町を過ぎ間もなく東京駅である。東京駅の側面の煉瓦の壁がみえてくる。しかし、久し振りに見る東京駅は周囲の超高層群に取り囲まれて小さく見える。そう言えば東京駅の保存が決った頃、駅の空中権を売却して保存の資金に当てると言うことが言われていたのを思い出した。今後の市街地の保存の切り札になるだろうと言われていた手法である。しかし、この手法では環境悪化をもたらすという意見はその頃からもあったが、私は、これで東京駅の保存修復ができるのであれば結構なことではないかと気楽に考えていたが、この過密な様子を見るとこれは保存と言う名を借りた、単なる容積増設計画だったのではないかさえ思えてくる。どのビルが東京駅の容積を食って大きくなったのかわからないが、歴史的建造物の保存と言うのは、その環境を含めた保存を考えるのが当然である。東京駅と言う煉瓦建築は残ったが、ゆったりとした丸の内界隈の豊かな環境はどこに行ったのか。

それにしても東京の超高層ラッシュは異常である。容積を増やすのに果して超高層しかないのかと思う。こんなに容積を増設して、50年後には日本の人口が半分になるこの国はどうするのだろうか。一方最近の新聞で「村が消える」という見出しが目に入った。市町村合併の事かと思ったが、そうではなく老人しか居ない村落は最後の老人の死で集落がなくなるという記事だった。私の知っている奈良のある集落はそう言えば、老人がもう2~3人しかその集落に住んで居ないはずである。おそらくあの集落はあと数年で地図から消えるのではないかと思う。なにしろ、東京一極集中である。この大きな移動のエネルギーは地域間の経済格差が拍車をかけていることは間違いない。超過密な沸き立つようなエネルギーに満ちた東京と枯れてしまったような地方が間もなくはっきりしてくることは間違いない。保存再生の今後はこう言った国の構造の変革を見据えておく必要がある様に思う。枯れてしまいそうな地方に居る我々は、廃屋となって行く町の建築を生き返らせ活用し、なくなる物はせめて調査記録にとどめる事はしておきたい。

私は奈良の地方都市で、歴史的遺産の調査や保存活動を通じて街づくりを行うNPOを立ち上げて1年になる。大した活動をしたわけではないがこの町は、古代から連続と続いて来た街道(伊勢街道と下ツ道)の交差点できた町で、現存する町家は江戸末期か明治20年代の建物が多くその多くは空家となっている。外観は地味な町家、いわゆるしもた屋であるが内部は明治大正期の活気があった頃の商家の佇まいがそのまま残されている。これらの家の調査はいままで誰もしていなかった。戦後の全国的な民家調査からは明治や大正期のこのような町家は外れているからである。私達が調査しているのは、残された遺産の価値を町の人達に知ってもらって、町づくりの一助になればと思うからであるが、このような隠れた宝物は近畿のように歴史の古い地方には沢山あるはずである。今、地方が生き延びて行くには、地方にしかない文化発見し育てる事しかないのではないかと思う。先日、新潟・村上市の田舎の暮らしや遺品を公開することによる町おこしに成功した話を聞いた。

保存か取壊しかと揺れる時、保存を主張する我々(文化)は所詮、経済と言う鉢に咲いた花に例えられる。鉢の栄養がなければ花は枯れる。しかし、村上市の話聞いて、村上市の経済は、城下町の伝統文化を栄養にして花咲いたと思った。今や東京都知事選の真っ最中であるが、それにしても東京のこの過密振りを何とかしようと言う候補はごく少ない。こんなに沢山の超高層群であるが、50年後、これらの超高層の中からどれが「重要文化財」になっているのだろうか。それとも取壊しも出来なくて廃屋になっている超高層が林立しているのだろうか。そんな姿は想像したくないものである。

北野の街から

長尾 健

(都市デザイン委員会委員)
(長尾健建築研究所)



異人館の建ち並ぶ神戸・北野町の一角にある集合住宅、神戸の街を見渡すことができる最上階に私の事務所はある。30数年前に建設されたこの建物はその後の高さ制限の変更で既存不適格となり、現行法規上では臨むことのできない景色を目の前にしていることになる。私の席に座ると、10年ほど昔、独立前に勤めていた事務所で修復設計にたずさわった異人館が見え、これがこの場所を選んだ理由の一つでもある。

阪神・淡路大震災により、異人館も、煉瓦積の煙突が軒並み落下し、老朽化していたものや、増改築された部分の多くが破壊された。(詳しいことは、「住まいの図書館出版局住まい学体系091異人館復興 神戸市伝統的建造物修復記録」を参考にされたい。)当時勤めていた事務所は元町の河合浩蔵の設計した明治の近代建築の中にあり、倒壊こそ免れたがとても仕事のできる状況になく、しばらくの間、私を含め3名のみを神戸に残し、主な業務は大阪市内で行っていた。

その頃には電気は使えたと思うが、ガスも水道もまだ復旧しておらず、できることをしながら留守番をしていたところに、ある日突然、神戸市文化財課の方が訪ねてこられて、そこから異人館の修復にたずさわることになった。

そんな中で区内でも最大規模のシュウエケ邸(旧ハンセル自邸)の修復を担当することになった。当然、幾多の困難があり、なんとか解決し無事完成を迎える訳であるが、その中から、10年という時間について思うことを記したい。

異人館通りに面するこの建物の震災前の姿には、少し不自然なところがあった。下見板にオイルペンキ仕上というお決まりの仕様ではない、モルタルに吹付タイルを施した部分で、所有者の話では、戦後ある管理下におかれていた時期に増築が施され、バーとして使われていたとのことである。煙突の落下に伴いこの部分が破損したことで、所有者はこれを取り除き、建設当時の均整の取れた姿に戻したいと考えた。

確かに不調和な増築であり、取り除いた方が建築として美しいのだが、上記のような、時代とともに生きてきたこの建物の



震災直後の様子



現在の様子

都市点描

歴史を伝えるという意味では存在意味もある。建物の保存再生をどの時点に置くのか、必ずしも当初の姿なのか、その歴史も含めて今に伝わる建築の姿を残すべきなのか？課題は残りつつも、「ぜひ当初の美しい姿に戻しましょう。」（やはりこの言葉には弱い。）という所有者の熱意に従うこととなった。

そうして震災復旧に加え復元作業が始まったが、当初の姿の資料が無い。現状の建物に残っていた痕跡以外には、文化財課にも所有者の手元にも図面も写真も無く、あるのは所有者の若い頃の記憶？のみという状態であった。そんな時、この辺りの景色をよく描いた洋画家の小松益喜氏の作品に、昔の姿を描いた物があることがわかり、その絵をもとに立面を復元することになる。ディテールはこの建物のほかの部分を実測し図面化した。幸い部分修復なので、お手本がすぐそばにあるのでよく観察し、外壁、建具、煉瓦積の塀、スチールの柵とも、できるかぎり当初の材料に近い物を吟味して選んだ。ただ、当然新しいものなので、明治時代から年月をかけてエイジングされたものとは風合いは違うのだが、これから長い年月をかけて馴染んでくれることを期待して、それ以上の変に加工された物は一切使わなかった。

ほぼ毎日その前を通りながら、見下ろしながら、あれから10年。意外に早く馴染んでくれて、喜ばしい期待はずれである。この前を通り、これを背景に写真におさまる観光客は、おそらくその復元部分があることに気づかないと思う。皆さんはプロだから、やはりすぐにお気づきになるのだろうか？



明治11年制作の写真品 山本通一氏蔵 小松益喜

参考にした小松益喜氏の絵



1階右側半分が復元部分

新入会員紹介

京都府	神野太陽	イースタン建築設計事務所	大阪府	緒方幸樹	緒方幸樹建築設計事務所
京都府	中村安奈	イースタン建築設計事務所	大阪府	下門杉廣	アクロス
京都府	松井哲哉	ウーズ	大阪府	根津嗣郎	建築計画研究所
兵庫県	水田 実	水田建築設計事務所	大阪府	水越 允	リトルグレース
兵庫県	米原慶子	神戸松陰女子学院大学短期大学部	大阪府	横田友行	(株)能勢建築構造研究所
大阪府	岩田章吾	岩田章吾建築設計事務所			

備後町2丁目

綿業会館が面している三休橋筋(さんきゅうばしすじ)。

この三休橋筋は御堂筋と堺筋のちょうど中間にあって、トウカエデの並木や点在する近代建築が、ほどよい道幅と相まって、豊かな景観を醸している心地よい通りです。委員会にみえられる方から最近工事をしているが何故?とよく伺います。調べてみると、地元やこの通りを愛する人たちの活動と行政とが連携してプロムナード整備の構想がもちあがり、いよいよ実施段階となったとのこと。工事は本町通～瓦町間から着手され、2007年春からガス灯の設置も始まりました。ガス灯は大阪ガスからの寄贈や堺屋太一氏を囲む中小企業経営者らの勉強会からの寄付金によって、中央大通りより北側の約一キロに約五十基設置されます。電線の地中化や歩道や植栽の再整備なども合わせて順次おこなわれるようです。土佐堀通～中央大通間がすべて完成するのは平成21年ごろとのこと。また、6月7日には点灯式が予定されており、これはアペリティフ=食前酒の日(毎年第1木曜日)の大阪では初のイベントも行われるそうです。

(A.K)

編集後記

6月20日、建築基準法等の一部改正が施行されます。施行に先だち、5・6月には改正内容の周知をはかるため、講習会が企画されています。できるだけ講習会にご参加下さい。また、来年末には、建築士法等の一部改正も施行されます。運用面にて、いろいろと混乱をきたす状況が予想されますので、手続きの期間等については、十分ご留意して下さい。

今回は、直接建築の仕事に携っておられない方々の目から見た、「和のこころ」ならびに「建築家像」等について、語っていただきました。みなさまのご参考になればと考えます。季節の変わり目、ご健康にご自愛下さい。(広報委員会副委員長 小池 啓夫)

広報委員会

委員長 小南一郎(大阪)
副委員長 小池啓夫(大阪) 横関正人(大阪)
委員 一尾晋示(大阪) 井上 守(大阪) 大江一夫(兵庫) 太田恭司(大阪)
木戸口浩之(京都) 佐藤洋司(大阪) 佐々木純一(大阪) 柴田敬四郎(奈良)
内藤 正(滋賀) 西濱浩次(住宅部会長) 橋本雅史(和歌山) 森崎輝行(兵庫)
事務局 穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日 2007年4月27日(春号)
発行人 吉羽逸郎
発行 社団法人 日本建築家協会近畿支部
〒541-0051
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374
ホームページ <http://www.jia.or.jp/kinki>
メールアドレス jia@bc.wakwak.com

表紙 水墨画「響 Sound」(大江一夫)